畝討袁根噺

十

壹

へ13
3325
1

貴 ヘ13
3325
1

白春

茶磯榮

敬討彦根噺　惣目録

巻之壹

一　藤四郎之進肥後無幸の大身く呂
　　まつ事
一　花房彦兵衛が妹を藤四郎一郎く縁組
　　えのぶさ　いもと　ふじたすけ　ゑんぐみ
　　の事

大正十年八月廿九日寄贈
本大學出版部

一 大守出雲国へ鷹狩の事
夏田ゑ留守を花房与兵衛に
与助一郎お掟よ数刻の事

巻之貳

一 国主西国の海中へ妖怪よ今の事
一 国主幸国よ着夏田後先の事
有のまゝすの事

巻之参

一 夏田助之進牧郷後先の事
与兵衛助一郎富士の事

巻之参

一 婦川七郎左衛門助一郎を退けんと
計らる事
一 夏田助之進ゑ座敷へ出者共びの事
与助一郎寛仁大京の事

巻之六

一 婦川七郎左衛門、同姓十左衛門縁組の義、去後の事

義 七郎左衛門、好曲より縁組破談の事

一 長田兄弟の事を右園事左衛門より報ずる事

一 婦川十左衛門、芸稚不如にして自害の事

巻之六

一 長田婦川、榎原出合指図の事

義 吉田大八森小右衛門義死の事

一 長田婦川取合義即之進父子喧嘩の事

巻之七

一 花房弥次郎、長人の如子より面元の板子を張る事

一 婦川七郎左衛門肥後の国を立退事

巻之八

一 百姓肥後の国より欠落く事

一 婦川七郎左衛門江戸へ出奔の領主へ仕る事

一 婦川七郎左衛門和田より欠て戸村七左衛門を討て立退事

巻之九

一 孝女多賀関東へ赴き敵討の事

一 安房先八郎殿の上洛の事

巻之拾

一 江刺彦根の城下にて敵討の事

安房国助次郎和田の領を不足の事

惣目録終

欵冬根紫巻之壹

目録

一 藤田助之進肥後へ参事の事

一 花房弥次郎妹藤田助一郎へ縁組の事

一 大寺四脈作出事

奥国之人、義賀寺
豊田ゞ留寺を元亨年
義助一命お梅よ教訓の事

敬対奥根野巻之壹

蒔田助之進肥後国の大寺へ
出家する事

享保年中の江州彦根城主世
子作ふるとの所の毛田来を事ぬ
きば能州久留米の浪人豊田助之
進といふ者ありて久留米

家を継ぎの後江戸芝の屋
敷にて一万年を送りしが
無幸の方寄り蛇術の稽古を
学び居るの業を誠に百度
百中宮よ稀代の名人なりしと
助を進よ初め百石を賜ひ居れ
らるるものなれば懸助一命富年
十七歳なりしが父が業を継

ぎ細工き中ひ父ゆも埋るれがの
後妻なれば助一命をも引き受け七年
人扶持をなされ小姓のなれ加へ
らるれば家四ぐ親ひ子よ産まま
でよおがく家中方年寄ぐ門人と
なり弟よ今年年春のなれ
後代の侍在府ありしき中よ姉川
十三郎とふものの妻長男

うらびとこどもは郡司うねのうち
うるぶるもあるべし門守ぬて領地を
うれば屋田も外うらびあり立位
むつまじく移りゐて伝授しく
うちに深ううるぶ助之進十三歳
より匂ひ上うは家内当所家より
あうれば新参のうちまれば侍者の
うづくもうきより生後他年うき

うちを続ぎうち書御うづうち
づけうき沈賀ううれより付ひ立後
の御もをかうが立くうくうども生後い
まぐ四宮ぶうきうれきうれども
新参の業乗ぢうるひうくうども家号
より立ちうくうて別ち助一郎ぶ
姉ううぶうきうるもの縁
を孫までも伝くぢうち

ちう二つゆはいやぐ長年の悔を書
車山家風より指南の長山新三郎
たく幸をとらぐ中ぐあがら中和
しちう去年がら山一つぐらの山和
家もまづきたれば鶯と山雷をへも
山去後わきれ屋とで中ちう長年の
十三清一郎ゆも乃ぐぐ近比為の
仕合ちう一新ぐも〳〵中をしまでも

これたく行きゆ思ちゆまちう七中
ぐしと早速返答ちよ乃ぐ中れぐ
助を返ちたちうびまたく〳〵
魂を去しる
花房新兵ぐ妹長田助一郎〳〵縁組の事
同藩より花房新兵ぐとつふのの内約を
三百石案内て ちゆ性を面ぐ長田ぐ藩家
より作て日比去中しちうれぐ長田

父子も云はるゝ事なれども今年二九の
ゞ姫名を和物と呼で
花盛りつゝ助一郎と呼ひを
通り歩び給ふ事ぶつい所なれども
所くゝ見せをきとゝいへども似合し
き用通られば物を又合助を近うし
へ戸入表向縁を組で治まる事の
と物をしゝ金ふ夜の数の物語り

合物物語を作をなく娘とあも
いて書をしで若衆で作つき
角上うれば物を縁金ばば衆
も角も元張び書をしてよ
まじい人の口説よりをば
身をありの物語りの面
の所ちをで手を
書を持て手孫の巻を来来

よりもいのるべし是皆父への孝行
ぞやさて無常の便りありともたゞ
き音信なきよ懸るべく申遣し
事は多き世の中なれば吉凶あれ
ば親子の中も兄弟もうとくなるとも
申通じなりと和解してうちとけ
ば兄弟もよろこび他の親類も
氏族あり兄弟はなかよくうちも

ぞげに候へ申疑しいかゞ親類の
者あれば其身の為にも頼もしく
しきながら縁組の事縁て承ひ
申し事いかにもゆるしやすき細
は媒を頼み婿取十方遠く縁組
いたすべく申合置かれ候是も通て
親ひ出申かり極れば早々の
ごとくも一門同に親しむべし

来よりおひてはをとこ法師のいるく
ちりとの物語よ和尚も俱よりて
こびをうれがまひ四くをりさせて
女婿いるしあとて車よりを夜着
ちく歩進くあ物の八ちやうして
と寿きをれば二人の若ものもい
をはをや降りちぎりの海士ごるも
家のあてうちのあてうちとびて

宝永四年の三月
家有ものをへよりをれより降
家のこ作ものきくをも招きて
四行しの酒宴よ雲ちくちろ

しちの巻

六寸山服作あれ風をく寝ゆ身
屋面ご留をを花屋よ新金年
矢助一郎初物よ教仏の年
新物の者もをくく西法四年の三月

上旬より立ねば南年いろ寺の雁年
ゆて出帰国のうちて一番中その
用をとりくちう豊田も今年は
そじめての出仕をとりくく
縁起の事も与よ在ゆて新しく
うと中合て中うう諸の用をを
元気ぐ稼よ家をを五日の雁の
出仕のうちて家中揮うて混雑

しそれば豊田も龍雲うくく行
うは家をや五日の供ゆて来うの
ぐううくい留守中の事い万端世話
よ新うう自しうて又の間約の縁
組の事い出ゆて新しく出すくん
うぐ早速五日を引をうぐし移
娘南方も却説と一同よ嘆句へ中陣方へ
きうう新ぐ本うう留の居かよ新う

宅とたのミ候へば元服前にて御留
守中の義は万事諸事気を付無油断
為り候へば御気遣ひなさるべく候
左候ても商売そこもとの御供なれば
御互その様子も御ぞんじなく御為
自由がちと存候ても御先
ごさ申せし御文言等委なと
申来の御報書申候なり

のみならず御尊様にても御息災なく
御名代せられ候のよしなるべく候
物等よりも書状にて申遣し置
候へば此の旨にても申せて御約束申べく
し且縁組等の儀は存分なるべき
時宜に御相談なさるべし末
と承り候へば御息女さまも妹さまも年
同居申べきあいだすこしも御気

きしいかるべうとゞとやうなれば度々の
重〳〵うゝ書面しと指越して急度
〳〵旅行の用をいそぎ申
あるべき物を今又別々事の
うゝ〳〵して即一命よりをつて
うゝは親兄の内々話ありがう
〳〵表をての驚嘆も浅ぎる日
間〳〵あるべう来年とや

ても往返〳〵弾よ身命の秋身よ
〳〵若驚嘆なれば去果ては事世を
知るう蓮葉の芳を新しやを
うゝみゝと洞を紬よばうきう
其時即一命は色を西方にてや
ゝゝを白とゝ知も生者必滅老か
不定を世のうゝ武士の
書角うゝ知るあいをしあるべ

の何ちう孔世めい致傷よ死きち
事をこと孔ふちう又いうぬ
て家ち出きてて自じきゆもゆらび
り喧嘩ちどゆて死す事ち
い踊ふこちを ちちふみて歌を
対て侍の書の物ことまづきち
書ちの ちよ ちがちて死後ま
での和尊ちう 侍をて考ち

ちをつきこを生一の見恨ちう見ちよ
射つのちう いちもぐ四十年
ぬ家の事ちるぐ市ち者伝坂上よ
ちて百人組のちち佐長弥ち清
とつふちのいつれい浪人ちく
ちを敵を殺ちちち多 法言の紙響
よ新自れいちきちらぐいものち伯父よ
塚系十郎言葉とて 弥平の要ちゆて

陰の上をうかがひ門伴も方様のう
ちうが所存申書つぐ世作ゆて同心の書
代のかわる時伴の伝奏預り清をへ
て命を七福うく書を唱もうく
夫婦対面むつまじく去三年をを
うちうち書如い風と別ひつて新
ゐどもうきよ流しうち帝元しうち
伴ゆう清うちうとび宮殿して

行とうく帝墨舟引幕うう赤角う
しがわう夜思ひがうく伴の元書
もうをうよ書うかい生の衣の重うお
伴うして夜明がまゆうう
まうう毎夜書うう百を
かの者を伴づき夜伴ようて幕月ゆて
をうし声のかうをかう祝詞
一門伴かうく告うかば平巡十郎

右歌をもじり仮名くづしよ
て拵て右の句を
行毎に書てさぐりの
きをつかまつる
筆のうつりを一
てまをぬきの限り
うつをつかまつて
の七書と化して

幻をとり寄せ
いきれよとうるぐ
行ものうつて
裡ものもよ書の
い行ぢをつ
よしや紫よ一
りうとも中情の
の仮名ぢ形
絵をかく
行ものうつて
裡ものもよ書の
い行ぢをつ
よしや紫よ一
りうとも中情の
の仮名ぢ形

思ひ終に相果るゝとや誠に悪
念の報ひ沈むときハ狐狸の変化も
かゝる事あり継母誠の前書にも
せよ去る利土しとして天気とある術で
生者と同じうらんやこのこ術も
無く殺して万人の為ひ外にある者
かくの如きもわれハ随分むさし
しく身を異国にて以てよりの役

を語らく諸悪無着次第に出し
て相添しかどむかしは早速に迷
ひの者をおそれべし妹と一緒に
奈のこきよとかるハ叱りかりひを
あじきなこゝろぐとや蛍てぞ知り
来る是ぞ一世のころのその迄
おもいかるきれぬうまて大事を
手例の通り首尾よく以戒作

西原庵

東京

220

あさまの原もうくゑまがはのうらわ
いづくの人かもとをきまれと花や
うゑしをきてのくにぐにをしる
おもひをきる

故付彦野宰之宰